

生の没落

Lyrics 1

渚  
言址

## 監視

じっと私を見つめる目がある  
身を貫くような、ぴりりとした視線  
逃げてでも逃げてでも  
振り返れば、あの目

(確か何処かで見たことがある)

どうしてそんなに私を見つめるのか  
それよりお前は誰なのだ  
すると答えは返るのだ  
「僕は君ではなかったか」

それじゃどうしたって  
どうしたって逃げおおせない

(1979.11)

居間に座って本を読んでいた僕が目を上げたとき、既に雨は止んでいた。灰色の雲が低く迫り、空などというものはまるで無いようだ。静かだ。何でも無い。何にも無い。灰色の天井はゆっくりと動く。

正面のガラスと僕との間には、ストーヴから立ち昇るゆらゆら揺れる暖気がある。だから灰色に沈む風景もゆらゆら揺れる。ゆらゆらゆらゆら、僕の中でも何かが揺れる。古くさい感傷だ。僕の中には、いつも必ずこの古くさい感傷が居る。外は何もない。何でも無い。

ガラスの向こうには、一本の細長い木がある。その向こうの画面を、二つの家が半分ずつ切っている。細長い木は、時々ゆらゆら揺れている。揺れる度に、私の中で何かが圧迫される。リズムとも言えぬ棒の如きリズム。低く一定の音で響くコントラバス。何でも無い時。しかし、叫びを思わせる歪んだ空間。

何かが私を揺すぶる。何だろう。どうやら、哀しみにうちひしがれた女が、突然私の肩を揺すっている。私は途方にくれて、揺すられている。何もしてやれない。まるで麻薬のように甘美なこの時。つまり、何でも無い時。

こんな時を、お前も時折過ごしているだろう。こんな時は何も判然としたものはない。ただ日々経験している、また、経験した具体的な感情——毎日上司に怒鳴られてシユンとしてしまったこと、思いもかけず他人に頼られて感激したこと、ある人の力強い主張に自分の無力を感じたこと等の、形象を持った具

体的な感情が、その形象を失い、ただ燐火のような哀しさ<sub>い</sub>けだるさ<sub>い</sub>喜び<sub>い</sub>という感情のみが、ぼつりぼつりと浮んでくる。いくら鋭いカミソリで切ったとて、ただ空を切るばかりで何も見出せない——そういうものとしての感情。何でもないもの。何にもない空間。何でもない時。

(1981. 春)

## 冬の海辺

豚ならば豚らしく  
鳥ならば鳥らしく  
人ならば人らしく  
役人ならば役人らしく  
芸術家ならば芸術家らしく  
僕ならば僕らしく  
君ならば君らしく・・・

そんなこんなで波打際に  
僕は何時までしゃがんでいるのやら

それほどに

波の舌先に光るダイヤの粒は美しく、軽く

重ね重なる潮騒は懐かしく

水平線はやっぱり水平なだけで

だから僕は立ち去りもせず

それほどに

遮るもののない風は僕を震わせ

足の指をなめる塩水はつめたく

水平線の向こうには辿り着く岸辺も見えなくて

だから僕は服を脱ぎ捨てもせず

ふと見れば

波の中から来たらしい

横這いする遠国の使者

僕はそれに砂を投げながら

啄木の歌を思い出しながら

ぼそりぼそりと呟く・・・

豚よりも豚らしく  
人よりも人らしく  
僕よりも僕らしく  
君よりも君らしく

(1982.2.4)

## 都の雪

馬鹿・・・馬鹿・・・  
殺しちまえ、ぐさりと  
常緑樹の枝をたわませる雪も  
その雪をゆらゆら揺する北風も

透明な光の中にぱつと広がる氷の花粉は  
俺の空虚な熱情を鍛えるべく  
堅い白野にしかれたレールに沿って  
隠れ里へと俺を運ぼうとする

俺の手で殺してやろう  
殺してしまえば、俺は  
俺は、春の哀しみに向かって  
やっぱり唾を吐くだろう

ああ愛すべき冬め  
俺の手で殺ってやろう  
一思いに

(1982.1.29)

やまかげの小唄

信濃川に雪が降る  
雪の白は何故暗い

真白い着物に雪が沁む  
肩は涙で濡れてゆく

誰も吹かない笛の音は  
だからきつと聞こえるのでしよう

ここにはきらめく色も無い  
ここには響く音も無い  
ここには流れる饒舌も無い  
ここには人の命も無い

ここにあるのは途切れ途切れの  
ここにあるのは溢れるような  
ここにあるのは・・・ことば  
そして、口ごもる唇

優しくしきりと降る雪の中  
ちーんと鳴ったのは  
うちひしがれた娘の目の中に  
さらりと溶ける雪の哀しみ

(1982.2.7)



## 雄渾

やって来た・・・  
鋭い頂にかすかに座る

見上げる塔はますます屹立して難しい  
仁王の何と高い、怒りではない

あらゆる仏像にますます力みなぎり  
地底を揺すぶる、その筋のわななき

蔵の中なる碧い器は自ら角を輝かし  
目を切る、その剣のおぞましき叫び

私はたまらず、両手で目を覆う  
突き抜ける天に上る痛さに

その時

梵鐘の響きが、次元を超えて  
割れた

そつと手を放したら  
確かに自分の今、在ることが  
確かに地面から伝わってきた

(1982.2.11)

### 小箱

乳首を見つめれば乳首  
つまめばゴムの如く伸び、縮み  
弾けば柔らかに静止するだろう  
けれども触れてみもしない  
静かに乳首は眠っている  
静かに寢息をしているので

突き出る様は花のつぼみのよう  
かたちはぬくもり  
色は微笑み

小さきはかわいらしさ  
困むのは羞恥の火照り

見つめる心は糸先の浮き  
春の川面のさざなみの光、影  
ぴんと張った甘い緊張  
前のめりのカメレオン

乳首を見つめれば乳首  
けれども触れてみもしない  
静かに眠っているの  
静かに寝息をしているので

(1982.2.21)

## 明確

僕が歌うは、つまりは記憶  
錆びた刀じゃ手首も切れず

それどころか、他人に切っ先を  
向けただけでぼろぼろと  
見事なお笑い種だろう

僕の歩きっぷりがまた  
これがまた見ものです  
専門家のイセエビだとて  
普段はやらない後じさり  
誤解をしないけません  
過去へ進むのじゃありません  
未来へ向かって後じさり、さ

道端には例の奴ばらが  
右や左と私に叫び  
それにつられた道化者  
あちらこちらとよろけつつ  
びくびくおろおろ後じさり  
道端の例の奴ばらは・・・  
いっそ笑い死ねばいいのに！

僕のつけた足跡の先では  
いつでも誰かが手を振って  
僕もやっぱりにこりと笑って  
手を大きく振るのだが  
道端の例の奴ばらは  
それを見るとなおさらに  
腹をよじって転げ回る  
早いとこ笑い死んじまえ！

道端の例の奴ばらめ  
僕が決して止まらないのを  
僕の、生命への隷属を  
僕の時空への従順を  
ちゃんと知っていやがって  
僕はこぶしを振り上げたって  
ますます笑って足をじたばた  
早く笑い死んでくれよ！

右や左に今日もつられて  
ふらふらよろよろ後じさり

泣きべそかいて後じさり  
未来へ向かって後じさり

(1982.3.3)

## 健康大地

広大な健康大地の夏の盛りに、私は笑われるべく  
驚ほどに尊大な、黒いマントのメフィストに笑われるべく  
私は東へと行くが、太陽にも迎えられず  
魂の叫びも、なまくらな霧に吸い取られ  
無音の明るい闇の中で私は灰をかぶり  
ただ、声無きすすり泣きを己の胸になすりつける

さぞやたくましく健康大地と訪ねてはみたが  
結局は、病棟の鉄格子よりのぞく蒼白なる眺めか  
それとも本当に大地はやつれ、病んでいるのか  
尋ねてみればと隣席を見るが、その女も何故か  
雑巾の如き顔をして悶えつつ眠り込んでいる

細長き黒髪は首筋にはりついている

ああ、私は死んだ大地を見ているのだ

緑青、赤カビ、青カビ、そして胞子の充満

健康大地はじくじくと体液を沁み出し

そのただれた皮膚の上を zeroes は行く、東へ

このなまくらな笑気が、車中の病人たちを

気違いじみた祭りに誘わないだけまだましだ

(1982.3.4)

小刀 白秋の落葉松風に

おじい様の古き小刀持ち

ほそぼそと鉛筆を削り

ほそぼそとくず落ち

ほそぼそと先はなる

鉛筆は削られつくし

小刀は意思もなく指にかかる  
ほそぼそと指を削る  
ほそぼそと先はなる

指もまた削られつくし

小刀は意思もなく意思にかかる

ほそぼそと意思を削る

ほそぼそと先はなる

意思もまた削られつくし

小刀は意思もなく削る

ほそぼそと何を削るか

ほそぼそと虚無の先はなるか

(1982.3.29)

## 幻想叙事詩

打ち寄せる波しぶきのよ  
うな曇り空であった



私はひとりぼっちでおせんころがしに立って  
きつと異っていただろ、彼女の時代の海の色を  
稲藁のようにかさかさした、汚れた海の色を見つめていた  
崖下の牙をのぞいて私は途方にくれたが、その時  
軽いめまいが私の身体を泳がせた

私は空よりも青い湖から蒸気の如く立ち昇った  
そして、可憐な女にささやくことを思っていた  
ところがその女はささやくより近く、私の前に立っていた  
「ボタンが違っているわよ」  
私は、自分のと同じ高さにあるその茶色い目に  
己の音楽までも吸い込まれていった

私はホームから階段を下りていった  
そして、私の前を歩いている人の足首を見ていた  
暗い泥水の沁み込んだコンクリートを見ていた  
せむしのような空間の重みが私の視線を支えていた  
そして、その足首を追って階段を下りきった私は  
もはやその重みによって押し潰され、消え失せてしまった

消えた前奏曲は、再び海霧のようにやってきた  
もの憂げな夏の陽光で静かに明るませながら・・・  
私は広い埃の真ん中に立つことを怖れ  
ぽつんと隅のほうに、低い鉄棒に寄りかかっていた  
時は一粒毎にきらめいてはしたたる滴のように落ちていった  
私は或一条の光に導かれて上っていった

雲間からセロファンのカーテンが垂れ下がる、ひとつまたひとつ  
その天幕の前を点の如きものが糸のようになびき、下りてくる  
小さな私は、それが自分を迎えに来る天馬だとは知らなかった  
それは次第次第に近づいてくるようには見えなかった  
ところが、あっと思った時、真直ぐ私にぶつかってきた  
小さな私は嬉々としてさらわれ、空へ舞い上がった

私の意思はその時、引いていたバネを放した・・・

過去はたぐり寄せるように、現在は強引に私を引き寄せた  
私は待ち続けたが、何も私を連れ去りはしなかった  
己の足で海を背に、歩き出さねばならなかった

(1982.3.7)

## 逆行

日照り続きの夏だった  
全ての草木は石ころとなり果てた  
地面を埃が這ってゆく  
それでもひび割れは埋まらずじまい  
何処までも、目を凝らしても  
ひび割れの網の目だった

都会の詩神はいつでもそっけなく  
喉が渴きっぱなし俺だから  
こんなに遠く逃げては来たが  
どうやらここでは俺の肺さえ  
すっかりひび割れるだろ  
口からは塵をばかり吐くだろ

アパートの部屋には隣りがあつたが  
ここでは隣りの音も聞こえない  
ずい分と広い密室です  
誰が言ったか、都会を砂漠と

きつとよほどの果報者  
きつとよほどの楽道家

前見て歩けばよかったと  
今では骨にも嘆願したいが  
ここでは骨さえ砂と散る  
指で地面に詩を書いても  
すっかり風が消してくれ  
すっかり独りにしてくれ

すっかり独りに全てが要るとは  
ちっともちっとも知らなんだ  
今では爪噛むことさえも  
すっかり俺の楽しみだとは  
ちっともちっとも知らなんだ  
とにかく進むほかはあるまいよ

(1982.3.29)

言い伝え

灰色に病んだ人は倒れてばらばらに砕け  
その破片は再び寄り集まって這いずり起き  
この情緒の国に片手をかける

その浜辺にはふかふかの白い雪  
やつれた掌はその中にさくりと沈む  
そのあたたかい手ざわりに彼は微笑する

岸辺にふるえる枯れアシは彼を見守り  
雪とともに波に染み、溶解する彼を見守り  
その国人のか細い調べを伸び上がってうたい  
灰白の天に爪先立って線となる

この国に流れ着けば死ななければならぬ  
青白く溶け去った後に残されたものは  
砂の中の黒い石かとも見えるしじみ

溶け去った人はここに到り

ついに無の音楽と転生し  
打ち寄せる波も、もはやその脇を戻り

ああ、その国は何処にあるか  
かつて繁く出ていた渡しもさびれ  
船頭は黙して私に語らず  
波に尋ねてもただ私を囓むだけで・・・

ああ、かの街に生きられぬ者の行くところ  
その国は何処にあるか

(1982.4.4)

## 往来

俺は既に孤立した

甲冑に身を固めた人々の中で

俺は常に言われた、丁重に

「忙しいので」と  
ナイト騎士たちは俺を見もしなかった  
鎧を着けない身軽な俺を

騎士たちは感じもしなかった  
すれ違いざま肩がぶつかり合っても  
だが俺は常に傷がひりひりとした  
その甲冑は冷ややかに硬かった

俺がその兜の隙間から  
彼らの眼を覗き込もうものなら  
俺はいつでも手ひどく打たれた  
籠手の一撃はひどく骨にこたえた

確かに俺は乞食だった、蹴飛ばされる  
俺は確かに飢えていた、温もりに

騎士たちの快樂に望みを託した俺は  
彼らと同じく、暗い闇へ  
鬱々とした欲望の粘液の床へ

深く、息苦しく沈みもした・・・

日の光に甲冑のきらめく、賑やかな往来で

今日も俺は飢えていた

今日も俺は乞食だった

(1982.4.9)

## 団地

暖かい日曜の午前

雀はちゅんちゅんと穏かだ、風も黙っている

芽吹く木々もかさりとのみ揺れる

僕は抱かれてもいたろうか、大きなものに

日は上ってゆく

ますます光は暖かだ

ますます風は穏やかだ



雀もうたた寝しそうだ  
静かだ

日は暖かい

ゆっくり遅寝した人も

朝食をすませ、出てきた、だんだん・・・

子供たちも飛び出る

今日は暖かな日曜です

日は注いでいる

雀はちゅんちゅん言っている

子供らも雀にならう、ちゅんちゅんと

何処からか物干し売りの声

ちり紙交換・・・

低い、青空

子供はきやあきやあ喚く

雀はちゅんちゅんならう  
大人も今日はへらへら笑い出す  
ああ、いらいらとしてくる

ああ、黄色い光

おばさんたちよ、うるさいな

子供よ、何を喚くよ

雀よ黙れ

草木よ揺れるな

ああ、ああ

畜生、今日は日曜だ

(1982.4.11)

戸を叩く女

真昼の乱暴な、強引な嵐の中を私は戸を叩き

新しい苦痛により、黴生える苦渋を塗り潰そうと  
激しい大粒の雨に鞭打たれて戸を叩き  
嘲笑の部屋を、欲望の白い歯の間に投げ込もうと  
背にしがみつく魔物の肌触りにおぞけりて戸を叩き

これこそは人間の永劫の軌跡か  
莊嚴な、逃亡に次ぐ逃亡の廊下か  
生命あることの身の毛もよだつ確かな証しか

生命から逃るべく生命にしがみつき  
黒い異臭放つ汗の沁み込む閨房の扉を激しく叩き、叩き……

(1982.4.5)

### 慰め、慰みもの

私は白い菊に触れようとする

菊は震えている

私は震えるお前を慰めようとする

菊はすすり泣いている

私は大丈夫と囁こうとする

菊は怯えている

私をして手を伸ばさせるものの何であろうと・・・

手は触れた

酸性の菌は飛び移った

菊は崩れた

なよなよと死んだ

(1982.4.19)

クモ

彼女は細い、白い腕を上げてみせた

その二の腕には、黒子がひとつあった

僕が触れようとするのを彼女は止めた、柔らかに

しばらくの間、私たちはじっと小さな黒子に目を注いでいた

すると黒子はつつと動き出した、肩へ、そして胸へ  
私は黒子ではなく、彼女の目を見ていた

ああ、これほどに慈愛のこもる目は見たこともない  
さっきの激しい愛撫の後、のぞき込んだときも

静かに、耳近く一言をささやいた時にも

ああ、これほどに優しくはなかった

これほどに深く透きとおってはいなかった

黒子は彼女の乳房の谷間に入り込む

すると彼女はそっと手で追い、導いてやるのだ

ああ、何という優しさだ、慈愛だ

小さな黒い毛の生えた八本足めが丘を上るよ

何と言おうと、彼女は私を制した

暖かな視線をこっちに向けることはできなかった

私はすっかり黒子に嫉妬した

私はすっかり黒子に嫉妬した

勝ち誇るように乳首の前に止まったあいつを

今にあいつは肌を噛むだろう

今に、さらに彼女の肢体を下りるだろう

果たして黒子は下りはじめたのだ

何と言おうと彼女は制した

あいつは小さなくぼみもよけずに下った、そして  
そいつがゆるやかな下腹を下りかけた時

私は軽くそいつを掃ってやった！

私はそいつを掃ってやった・・・

すると彼女は指さしたのだ、戸口を

ゆっくりと、失くした黒子を見つめたままに

そして彼女は言ったのだ、静かに、厳かに

「行ってちょうだい」と・・・

(1982.4.21)

## 雑文化

単調なニュースを聞きながら

何と俺は詩を読んでいた

外では餓鬼どもがやかましい

何ということだ、この滅茶苦茶な流れは

狂人は首相の答弁にナイフで落書きをし

餓鬼どもは晩の聲に銀行を襲い

ああどうしたことだこのもつれ

ながら、ながらとこんぐらがる

ああもう御免だ、放っておけ

乳房の谷間に国債は増発されてままごととなり

三輪車のベルはインタヴューに答えて放浪の歌を作り

永遠は餓鬼どもの泣き声にこだまして閱兵を天に上らし

俺はやって来たのだ、太古の混沌の中へ

ところでこいつはどろどろじゃなく、悶えうごめく

太い、色とりどりの綱の掴み合いなのが見える

何ということだ、このもつれた様は

俺ひとりじゃ到底めんどうは見切れぬ、解けぬ  
誰か来てくれ、蛇だ、蛇だ

(1982.4.24)

### 詩神の死

私をうたわせるものは、ただ一つ

この、今は踏みにじられている詩神の死骸  
私はそれを腕に抱き上げて歩き出す

ぺちやくちや囀る詩人たちの溢れる往来を  
私は流れに逆らって、ぶつかりぶつかり  
詩神を腕に歩いてゆく

抱き上げた亡骸の重さのため  
私の歩みはのろく、しかし、しっかりと  
大地を踏みしめて、己に歩みを確と伝える



私は返しに行くのだ、この亡骸を

詩神の初めて下り立った荒涼とした地に  
光が彼を連れ去ってゆくだろう、故郷へ

そして私は再び歩き出すのだ、往来へと

詩神の教えを血とし、肉となして

詩を書くために、己の血で書くために

(1982.4.25)

## 白樺

灰色の霧が私の呼吸を苦しくする

ここは確かになだらかな広い高原であるはず  
それは分かっている・・・急ぎはしまい

この得体の知れぬ蜂の、小さなうなりは

これはまたどうしたことなのでしょう

霧の流れの如く単調にひしひし響いてくる

誰かの歌声が霧と共にゆらゆら漂ってくる  
鹿は一斉に首を上げ、耳をそばだてるだろう  
しかし、そんなあざけりに立ち止まりはしまい  
この単調な歩みが、私の生活の綱なのです

鹿が鳴きだした、次々に取り囲まれてゆく  
色が失せてゆく、身体がひりひり冷えてくる  
迫ってくるものがある、四方からじりじりと  
私の頭を垂れさせるもの、迫る

ふと左頬がひんやりとした・・・風

それは微かだったが、十分よ  
歌声の主や、にじり寄る壁を慌てさせるに  
私はただ、今はこつこつと足を交互に前に出すだけ

すると、私の部屋の白い壁から浮き出た  
白樺、しかも見覚えのある

全ては消え、立ち止まってよかった  
幹にもたれ、掃われてゆく霧を見ていた

(誰が霧を掃ったのだろうか・・・)

(1982.4.29)

太鼓 G.Mahlerの交響曲第6番に寄す

戦場は活気を呈していた！

ドンパチ、ドンパチ、どえらい騒ぎ

一進一退のこう着状態

守りは堅い、こちらもあちらも

突撃かけても10歩で退却

司令官殿の首はひねられっ放し

ところがそこへ聞こえてきた

ドンパチ騒ぎを縫って次第次第に

規則正しい、あれは小太鼓

味方が敵か、双方兵士は耳を澄ますよ

しかし異なること、この20世紀に

ナポレオンでも生き返ったか  
鼓手を先頭に行軍とは！

硝煙の立ち込める中、兵士は目を凝らす  
すると煙の中より現れ出たのは  
何と、まだ6、7才の少年鼓手  
双方の前線の真ん中歩いてゆくぞ  
しかもたったひとりだ、おお太陽よ！  
タツタラ、タツタラ、タツタラタ  
ジャンヌダルクも蒼ざめる

一心不乱、前を見つめて少年は  
リズムカルに叩いて進むよ  
我に戻った冷徹な司令官殿等  
うるさい蠅だと射撃命令  
双方から一斉射撃！  
ところが名手たちも慌てふためき  
弾はぜんぜん当たらない

タツタラ、タツタラ、タツタラタ

少年鼓手は軽々と前進

司令官殿等、やっきとなって叫ぶや叫ぶ

射て射て殺せ、敵は放つとけ

ドンパチ、ドンパチどえらい騒ぎ

それでもやっぱりタツタラタ

少年鼓手は前進前進また前進

死人から溢れた内臓を踏んで

嬉しげにバチは動き続ける

父親のバースデープレゼントか、その太鼓

それとも何処かで拾ったか

少年鼓手はタツタラ、タツタラ

とうとう射撃の真ん中通り抜け

また硝煙の中に消え去った

一斉射撃もやむなく中止

呆気にとられた兵士や士官

困り果てて呟いたは

「はて、どこまでやってたっけ」

(1982.5.1)

己の蒼白な弱さに銀の刃を当て  
すいと軽く引けば

紅の血は半球をなして盛り上がり  
そしてぼろりとこぼれ、肌をつと下る

見つめる目の周りに緑の斑点

砂模様の幕は私を包む

この頭はふわりと宙に浮かび上がり  
私はなおも倒れずにいる

ついに誰も分かつてはくれなかった

そしてまた、己の弱さ故

自ら断罪を下す時は来た

もう堪えられない、立ってられない

げっそりやつれた肉塊とねばねばした皮と

目だけがぎらぎらと飛び出た顔に、もう

もうとても堪えきれなかった

私はやっとのことで立っていた  
もう堪えられなかった・・・

(1982.5.7)

古いカノン

日の光、日の光、高原に  
高原に、花咲き乱れ、咲き乱れ  
少女は駆け、日の光、高原に  
咲き乱れ、少女咲き、花の光

白いスカートは蝶の求愛を呼び  
リュートの音は響かずに奏者の耳へ  
この丈低き草の野原見て、青年は呟く  
ただ、広し、暖かし、と

少女駆け、日の光、花をつみ

日の光、花をつみ、高原に  
花をつみ、高原に、少女駆け  
花の光、高原に、少女咲き  
咲き乱れ、高原に花は、日の光  
光の少女、駆け回り、花と咲く

(1982.5.9)

## 柱廊

淋しい柱廊は長く続き  
大理石の冷たい手触りに力を奪われ  
柱にくずおれて典雅な哀しさはふくれ  
風は涼しく胸の中に、さや、さやと  
これが春なのか、これが・・・

淋しい柱廊はどこまでも真直ぐに  
その古風さの故、誰も歩きはしない  
うち棄てられた冷たい空気は流れ



聞こえてくる弦楽合奏の幽かな響き  
立ちすくむ骸骨の視線にも似ている

誰も私と歩いてはくれない

運命に甘んじて従うこのかすかな心に

誰が身を寄せるはずがあるう

何処までも真っ直ぐに単調なこの柱廊を

誰が静々と堪えて渡って行くはずがあるう

静寂の中で絶望という力にすがり

素足に伝わる冷やややかな柱廊に

余儀なく立ち上がる私に

全ては無言かつ不動のまま

絶望のみを強いて、ただ続いている

(1982.5.14)

## 別離

行ってしまった

ああ、行ってしまった

ただ、時計の振子の音だけが迫ってくる

眠ろう、真っ白いシーツにぱったり横になって

ああ・・・眠ろう、ただ・・・

残された心臓の音だけが迫ってくる

ぽかんとした壁に四方上下を囲まれて

うらうらとヴィオラの音だけが眼球を押す

ああ、横になっていよう

お眠りなさい、ただ、ただ・・・

優しく重たい掌が肩にそっと触れる

ああ、力が逃げてゆく、全て飛んで行く

乾いた涙の這い跡に、また

また涙がたらたらと流れ

鼻水もたらたらと流れ

かさかさになった頬を枕に当て

さあ、眠ろう、目を閉じよう

ああ、冷たい枕が心地よい・・・

(1982.5.16)

### 逸楽の時

逸楽の時、僕は夢見る

没落の夜の転々とする寝返り

長く続き過ぎたこの穏やかな午後は

今は既に日は傾き始めて影も伸びてゆき

頑なに日の光を拒んできた僕の心を

何故か次の夜明けの薄い赤色へと運ぶ

今この時を楽しまず暗闇にこもって

何故に次の日の陽光の下に楽しみがあるか

幸福の荒野から逃げ出して来ながら  
何故に次の荒涼とした原野に堪ええよう  
再び日の光を忌み嫌って苦しみ  
また没落の夜の寝苦しさを夢見るが関の山

果てしなく満たされぬ心が連なるばかり  
逸楽の時にただ、柱廊の彼方を見やり  
己の内に潜む何者かに焦心して  
理由もなく立ち上がる度に  
理由もなく忿満を吐き散らすばかり

(これこそが幸福の時よ・・・)

日が傾いてゆく  
影が伸びてゆく

(1982.5.18)

## 残照

岸まで迫り並ぶ森に囲まれた湖に

今、木の幹の格子の間より琥珀色の光が射し  
全ては己の長い影と親しく笑い合う

この時こそ太陽と差し向かうことはでき  
光を手やすく取って飲み干すことはできる

木々は全てオレンジ色の背景の中に

墨の如く、影絵の如く、黒い切絵の如く並び  
湖面はただ静かにゆらゆらと揺れて

向こう岸より金箔の浮き橋を掛け渡して眩く  
古木にもたれかかる休息の人の目を細めさせる

浮き橋の上に、うなだれる白鳥のシルエット

夕日の如き酒を注ぐ黄金の入れ物に似る  
酒の中に沐浴して旅人はうっとり酔い

白鳥は羽ばたいて金の滴を散らす

眠りが別れの哀しみを溶かし去る残照です

(1982.5.23)

鏡

それに俺はどっさり壊れものをかかえこんでる（萩原朔太郎）

虚栄の華がぱっくり咲いて

触れると吸い付くような花びらの中に

暖かな季節へ向けて恥部が曝された

彼奴は向こうでニヤニヤ笑っている

つまり俺は鏡に向かって歩いていたので

真っ赤に俯いて、つまづきつまづき

身体中の筋を堅くこわばらせ

衆人の注目を一身に背負っている

意識が鏡から強烈にはね返ってくる

即座に、しかも一分の狂いもなく

何と微に入り細を穿っていることか

しかもこの鏡は俺自ら据えたものよ

それに俺はどっさり壊れものをかかえこんでる

何時ガラガラと崩れ落ちて粉々に割れ

ガチャンという悲鳴が神経を引き絞るかと  
はらはらしながら鏡を見て歩いている

誰も近寄るな、俺を見るな

足に力が入りすぎて震えてくる

手が凍り付いて動きが利かない

首が回らない、目の端しか見えない

彼奴がよろけると俺もよろける

どうしたんだ、これじゃ逆さまだ

俺の魂は彼奴に奪われてしまったか

では、俺はどうとう操られる側だ

意識が鏡から強烈にはね返ってくる

これでは歩くことさえが踊りだ

ああ、意識を超えた無意識が欲しい

ああ、自我を越えた自己が欲しい

(1982.5.19)

紅  
E. ムンクに寄す

俺は他人を傷つけるために生まれてきた

己の小っぽけな虚栄を咲かせるために生まれてきた

ああ、何とグロテスクな色香だ、吐き気がする

こんな花はハエを集めるぐらいがせいぜいよ

血溜まりに伸びた枯茎の先に咲く赤黒い痛みの花だ

俺は他人を傷つける度に自分も血をだらだらと流し

そして他人はけろりとしてびくともせずにいるのに

俺の方は、心臓に生えた鋭い枯茎の成長に

ますます苦痛に呻いて胸元を押さえ

切り取ってしまうこともできず

神経と動脈の通った堅い枯茎が伸びる様を

ただ絶望的に息を吐いて見つめるだけだ

ああ、長く伸びた茎のどこかに揺れる度

俺の中で肉がびりびりと裂け、骨がみしみしときしる

偽善の血がぬらぬらと流れ出す

悶え苦しみ、身をねじるほどに枯茎は笑い



俺の声は高く低く波打って、突然に  
あたかもキャラコの布を引き裂く如き叫びとなる

その叫び、何であの無慈悲な植物に通じよう

この寄生はまさに一方的で、げに相互依存のかけらもない  
ああもう駄目だ、堪えられない

ナイフだ、よく切れるナイフをくれ

それで喉頸を掻き切り、腹を滅茶苦茶にかき回してやる

そうとも、腹だ、あの堅い茎は俺には切れない  
どうしたって切れない……

(1982.5.23)

## 煙

煙草を吸っては咳をし

咳が続けば涙がこぼれ

その涙を哀しみの色に無理矢理染める僕の前に

果てしもなく味気ない夕暮れが、よそよそしくでかい

抱き締めて、抱き締めて、抱き締めて・・・  
愛のかけらもないのに、僕の空々しい想いが  
真正面から怪訝な表情で見つめる顔に敗北して  
へなへたと崩れて天球を見上げ、ますます拡がる

かつて僕に囁いてくれた自然は、今  
すっかり無言で、勝手にやって  
いつも忙しいという顔をして見向きもしない  
ここに至って僕は自分がのけ者と悟った

ならば煙草をふかすまでよ  
げほげほ咳などかまっちゃいない  
拳句にこぼれた涙なんぞも  
どうせ勝手な色に染めるさ

(1982.6.3)

## 石ころ

ああ、僕は何とお人よしだったのだ

背中にろくでもない石ころをどっさり背負って

しかもいつかは役に立つかもしれないという馬鹿げた希望に  
その石ころを何年も棄てきれないでいたのだ

つまりその石ころの重さを価値の重みと想ったのだ

そしてうんうん言いながら御苦労にも歩いてきたのだ

ああ、何と阿呆らしい今までだったろう

僕は「選択」が愚かだという言葉を信じた

ところがそれは石ころ百万個より重く

そして苦しく、しかも美しいことだったのだ

僕は、何とろくでもないガラクタを収集してきたのだろう

僕を蒼白い病にまで陥れたのだ、それらは

もう「寛容」なんかとはおさらばだ

ああ畜生、何と僕は愚かだったのだ

もうこんな石ころは全て地面に投げ捨てよう

思いもよらなかつた、棄てることが力を呼ぶとは

解放だ、しかも苦渋に満ちた選択だ  
こんな石ころは千年たっても食べよう筈もない  
どんどんやれ、どんどん捨て去ってしまえ  
何が残るかわからないが  
しかしそれが僕の携えてゆくただ一つだ

(1982.6.9)

## 中庭

宮殿の方形の中庭はひっそり静まりかえって  
敷きつめられた肌色の大理石はひんやりして  
午後の影がその半分をおおっていた

庭を囲む廊下に腰掛けて、俺は  
頬づえついてその中庭を見つめていた  
風もなく音もなく、砂漠の中の宮殿はひっそりしていた

その大理石の上の光と影の境に

もっと柔らかかな肌色をした男女が  
影に染まり、光を浴びて、ひっそり動いている

息をしているとも思われぬあの二人は

しかし波立つように身体をくねらせている

上になり、下になり、影になり、光になり・・・

光と影の境界線が彼らの肢体をなぞってゆく

男の手足の筋肉の動きや、背骨の曲線や

女ののけぞった弓なりの線や、乳房のふくらみや・・・

全くの無音で、人間の心臓も止まっている

男も女も、その顔には石のように何も無い

ただ、形だけひとつの憂いに似た無音の運動のみがある

この熱地獄の砂漠の中にある宮殿の中は

これらのひっそりした静寂の故に

ひんやりとした、じっと動かない水槽のようだ

情熱も歓喜も憂愁もない抱擁は

ただ脈々と無表情に行われ  
それを見る俺もまた何の感情も抱かない

(1982.6.5)

## 不安

限りない懷疑だ、限りない羨望だ

この二つが俺の中でじっとにらみ合っている

既に希望は死に絶えた

そして今や憎悪さえもが、がくりと膝を突いた

あの歡喜に紅潮した頬と

あの半開の唇から洩れる喘ぎと

そしてぴくりぴくりとわななく肢体が

俺の中でかろうじて立っていた全てをひれ伏させてしまった

俺の目の前の、この地獄の営みを、一体何と

一体何と呼んだらいいのだ

あらゆる者から力を抜き去るこいつ等を

ああ、俺にはもう何も分からない

ただひとつだけは言える

確かに俺は広大無辺な世界を見下ろしている、と

(1982.6.18)

### 或午後風景

たるんだ電線の上を小さな子供が歩いてゆく  
空はぼんやりとしてけだるく流れ  
それをはるかに渡ってゆく白馬

僕は部屋の中だ、頬づえ突いて  
重々しい夏の風景は閉ざされた原風景に似て  
何も語らずに、ただ見えるだけ

僕は詩人ではない  
だからその向こうを見ることは出来ない  
ただ「在る」ということだけが感じられるだけだ

風が吹いていないのに木が揺れ、ざわめく暑さにしなう幹を、地が顔を引いて避ける誰も僕の目の前から立ち去らず

今だ、在る・・・ただ、在る・・・

全ては自分のことに手一杯で  
そして、あくまで孤独に歩く

(歩け・・・、歩け・・・)

(1982.6.21)

## 扉 ファンタジー

私が混乱のどさくさに紛れて掏り取った鍵は  
実に魅惑的な形をしていたらしく

その鍵を扉の前でポケットから取り出すと

扉の鍵穴の方から鍵に向かって磁力線が出て

私の手からその鍵を吸い取って

扉はその鍵を啜えて満足げに笑った



私は扉を恐る恐るちよいと開けて  
扉の向こう側をのぞいてみたところが  
無数の白い手が私に向かっておいでおいでを  
私に驚いてそこから逃げ帰りました  
扉をばたんと荒々しく閉じて、夢中で――

(1982.7.3)

## 放浪

己の業の深さにぶちのめされて  
他人の自然に膝を折って  
僕は何時でも幸福の一步手前で  
みじめにすすり上げて泣きじゃくり  
涙でぼろぼろに崩れて疲れ果て  
遂に敗北して立ち上がり  
回れ右して、振り返り振り返り歩み去る

いくら彼等の前で道化た踊りを舞ってみても

自分が差し出した両手に恐怖して  
彼等の微笑の中に哀しい希望を見出して  
もう何もかもがガラガラと崩れ去り  
その瓦礫の山の中にただひとつ残り立つ碑に  
絶望と刻まれた碑にしがみついてしまい  
真蒼になって踊りながら退出する

羨望の果ての哀しみが僕を押し戻す  
恐怖の果ての憎悪が僕を追放すべくはね返ってくる  
ああ、またも僕はこそこそと逃げ出すのだ  
人々の楽しげな笑いの中から  
温もりに満ちた生活の中から

(1982.7.6)

## 都

雅な夕暮れに莊嚴の気の満ち満ち  
高下駄の音を転がしつつ歩く私に

朱色の光は時の道を指し示し  
浴衣姿の私に千古の重みを与える

軒並び、互いに向かい合い  
私の歩く姿を厳かに見送り  
打ち水にわびしく光る石を敷き詰めた道に  
苔むした低い音が私の足下を過ぎる

現在が時の流れの舌先であることを  
この先に未だ時の存在せざることを  
私が時の舌先に立ち、今  
時と共に世界を造っていることを、信じたく・・・

ならばこの夕暮れも私のものである  
ならば明日の夜明けも——私のものである

(1982.8.29)

## 生の没落

時の逃走するを追いかけて息を切らし  
常に瞬間と静止の中に沈黙の焦燥を残したまま  
がんじがらめの縄は次第に肌に食い込んでゆき  
深くゆっくりと下りてゆく、無限の圧力の中へ  
苦痛の群れて乱舞する中に見え隠れする  
生気に満ち満ちたりズムで踊る顔、顔、顔・・・  
目が音を聞いているのか、耳が姿を見ているのか  
感覚の転倒は既に官能の泥に塗りたくられている  
ぴしりと音立てて破れた皮膚の丸みを帯びた傷口では  
黒く固化した血の中でまるまると太った蛆が蠢く  
呻きながら失せてゆく光も搾り尽くし  
生へ己を繋ぎとめる手摺を求めて喘ぐ唇は半開きのまま  
哀れ、復活のない永遠の密室に閉じ込められて  
生活という単調な時間の大河に破れた者が落ちてゆく

(1982.11.22)

帰郷

思い出したようにふんわりと舞い落ちる  
そんな並木の枯葉の上には  
ひっそりとうづくまる微笑の小人

背中に響いてくるグラウンドの遠い歓声は  
見上げる雲の中へ吸い込まれてゆき  
哀しい温もりとして陽光と共に降り注ぐ

細くしなやかな手が私を引いてゆく  
その優しい、そして冷んやりとした肌触りは  
瞬間の慰めと永遠の寂寥を暗示する

「行きましよう、風の吹く方へ、後悔の歩む方へ  
貴方の心の奥深くに語りかける永遠の秋へ」  
彼女の手はますますに哀切に優しく――

思い出したようにふんわりと舞い落ちた  
波木の枝から黄色の枯葉が

そこからひらりと飛び出したひとりの少年

私の足下を駆け抜けてゆく、喜びに満ちて

思わず振り向いた私は見た

少年を抱き上げる父親の笑い顔を

そして少年は父親の手に引かれてゆく

無邪気に、時折駆け出したりして

哀切な心を包み込む木々を振り向きもせず

見とれる私の耳元に優しい声はささやいた

「戻ってはなりません、凡俗な人間の中へなど

心を干からびさせる生活という砂漠へなど」

その時私は優しい手を放した

彼女は思わず自分の不覚に蒼ざめた

口にしてはならぬ一語を言ってしまった不覚に……

生活、ああ、生活よ、忘れ去った言葉

陶酔が何だ、所詮は閉ざされた部屋よ

御前の慰めなどは甘美な色をした鎖だ

戻ろう、僕は生そのものでありたい

見るだけでは、感じるだけでは——死ぬだけだ  
戻ろう

(1982.11.12)